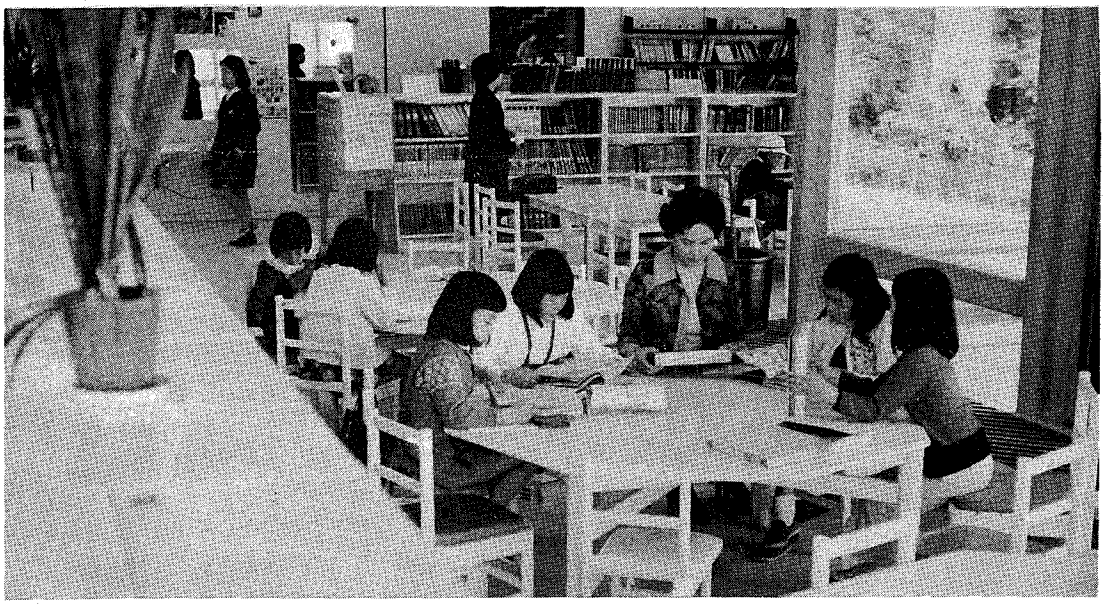
島根県立図書館報

図書館だより

題字　島根県教育委員会教育長

号数　第13号
発行日　昭和46年5月1日
編集・発行　島根県立図書館
松江市内中原町52
TEL (0852) 22－5725
印刷　㈲高浜印刷所



小中学生室利用風景

わ　が　子　の　読　書

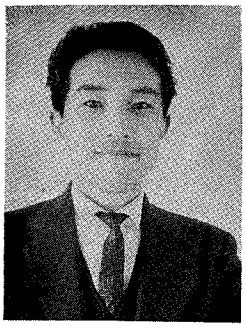
台所でトントントンと大根を刻んでいると小学２年の長女がそばに来て「ムテキって何？」という。「霧笛って船がボーッと鳴らす音」「汽笛じゃないよムテキだよ」「そうよ。霧が濃い時に衝突しないようにならすの」「ムテキのウルトラマンだよ」「え!?　無敵なら敵にする相手がないんで強いということ。」ずい分イメージがくい違ったがこういうような会話がよく交わされる。道を歩き乍らでも「○○って何のこと」と突然問いかけるのでとまどう。きっと読んでいた本の中の疑問点を思い出すのだろう。時々難かしい言葉を上手に使っているのは本のおかげだと思う。

新しい図書館が自宅近くに建ち、まるで自分の家のはなれのような気安さでしかも楽しい雰囲気で本が読める。初めは図鑑のようなものだったが、お話の本をどんどん読み出した。テレビも好きだが、それと同じ位かそれ以上に本も好きだ。

まだ小さい頃に悲しいお話の本を読んで聞かせたら、子供は涙を出していた。私も初めて読むお話で胸をつまらせながら読んだので、気持が移ったのだと思う。読書に限らず親が新鮮な気持で興味を持てば、子供に伝わってよい結果となって現われるようである。

読書に対する環境と親のもっていき方で、知性と感受性の豊かな子供に育っていくのではないだろうか。

松江市北堀町97　竹　内　陽　子



子　供　と　読　書

指導主事　荒　川　　勲

花に誘われたのか。だれかに呼びかけられたのか。花に集い、羽音を鳴らして歌う、はちやちょうの舞いを無心にみつめるのも、格別の趣きがある。

かたわらにいた女の子に、「どうして、はちやちょうが花をたずねるのだろうね。」と、問いかけると、その子は、とっさに、「みつがあまいから。」と答え少し首をひねっていた。そして、おもむろに、「生きられないもんね。」と言った。

わたしはこの子のなにげない答、それをたいへんおもしろいと思った。そして、ふと、そこには子どもの読書発達の一断面を簡潔に比喩するものがあると感じた。

いろどりなのか、かおりなのか、それとも蜜の甘さなのか、かれんな虫が思わずその羽音をおどらせたのは。読書の世界をふりかえろう。幼い子どもたちは、作品が誘い込んでくれる夢多い世界に遊び、そこに喜びをみいだし、あるいは、作品が運んでくれる驚異に素朴な体験をぶっつけて、いままで知り得なかった驚きを一つ一つ成長のアルバムに綴っていく。読書はその作品から、その文章から、子どもたちが喜びや驚きを発見することから始まる。

しかし、女の子は言った。「生きられないもんね。」と。

ちょうやはちは、蜜の甘さに酔いしれたのではない。彼等はそこに彼等の生き方を求めたのである。彼等の生きる努力、それが花に群れる彼等の姿そのものであった。

読むこと、それは甘い感傷に浸ることではない。雑多な知識欲を満たすことでもない。人間が人間らしく育つ努力の実体そのものではあるまいか。ちょうやはちは、蜜を求めて生きる。人間は書物の中に思想や行動を求めることができる。読むということ、そのことは、思想する生き方、科学する生き方を求める人間の歩みそのものではなかろうか。

ところで、このようなことをとめどもなく考えていくと、子どもの読書発達は、子どもの生活の充実そのことと深い関係があるように考えられてならない。

その1つ　生き方への問いかけ

1冊の物語りは、それを読む子どもたちに限りない問いかけをしてくれる。そして、また、それに読みひたる子どもたちは、彼等の問いを、作品に立ちどまり、立ちどまり問いかけていく。その問いかけは、実は子どもたちが思想する生活そのことに外ならない。こうした歩みは、やがて、子どもたちによりよく読む眼を育て、またよりよいものを読む眼を育て上げ、子どもたちのよりすばらしい成長を促してくれるのに違いあるまい。

その2つ　見方、とらえ方の実践

学習とは、子ども自身が刻一刻とねらいに見合う能力や態度を獲得する過程である。こう考えると子どもたちが自分の手足で、自分の方法で課題の解決に立ち向かうことが要求されてくる。この能力、態度の差は学年が進むにつれて自立心や学力の差となって現われることが多い。学校図書館から、公共図書館から、あるいは勉強部屋の本棚から必要な資料を見いだして、課題の追求に立ち向かう。そのことによって子どもが獲得するのは、ただ適切な解答だけではない。彼等はそこからよりマクロな眼、よりミクロな眼、そして方法する態度をひとりでに自分のものにしていくことができる。

そのためには、まず幼い子どもたちを、おはなしの輪にひきこんで、本のまわりに集めたい。童話や物語り、そして、ノンフィクションなどの書物が拡げてくれる、想像する・科学する・思索する世界にひきいれたい。読むことに興味をみいだす、おもしろいから読む、読みたいから読む子どもたちがそこに育っていくであろう。いままでより、よりねうちのある子どもたちの生き方がそのときから新しい胎動を始める。本と遊び始めた子どもたちは、やがて本と共に育ち、情報のはんらんと流動のはげしい世の中に、ひるむことも、とまどうこともないであろう。

本は子どもたちが自分をみつめるなかまであり、科学するなかまである。テレビの視聴を、母と子の話題をたしかめたり、ひろめたりする場にも本はなかまいりする。勉強部屋にも、なにかを試みるときにも本と手を結び合う場がある。

しかし、いついかなるときも、読めるということに重要な意味があるのではない。読むということ、そのことが重要である。

声

移動図書館のおじさんへ

湯里小学校４年
沼　　享　美

おじさんいつも本を持って来て下さってありがとうございます。

わたしは本がだいすきです。どんなにおもしろい遊びをしていても車が来ると、とんでいきます。

車の来るのがおそくなった時は、わたしはいらいらしているんですよ。おじさん出来るだけ、早く来て下さいね。

わたしは、小さい時、おねえちゃんに、シンデレラひめという本を読んでもらってから本がだいすきになりました。だいたい毎日本を読んでいます。

移動図書館には、おもしろそうな本があるでしょう。だから、どれにしようかと、よっているとすぐ時間がなくなります。だからもう少し長くいてくれたらとてもうれしいです。おじさんなんとか、考えて下さい。

それからもう１つお願いします。

おもしろそうな本はたくさんあっても車が小さいし、子どもの本とおとなの本がいっしょにしてあるので、子どもの本だけの車になったらどんなに楽しいでしょう。

こんどはなん月に来られますか、早く来て下さい。冬の時のように、３カ月も待つのはいやです。

西田にも来てほしい

湯里小学校４年
西　本　賢　一

「移動図書館が来ますから皆さん本を借りて下さい」有線放送で聞くたびに、なぜ西田分校にも来ないのかとても悲しい気もちになります。ぼくだけではなく、みんなも同じ気もちだろうと思います。道が悪くせまいので来ないのかな。大がたトラックぐらいの大きさの車なのかな、などとそうぞうします。

ぼくは４月から本校にきたから今年こそはうんと本を借りて読むぞと今から楽しみにしています。ぼくは大むかしのくらしが知りたいです。今までくわしく書いてある本は読んだことがありません。昔の人は魚やけものをどんな方法でとっていたのだろう。早く読みたいです。できたらこのような本を何種類も持って来てもらったらうれしいです。

ぼくは本校にきたからよいけど西田の人も借りたいと思います。

こんどからは西田の方へも来てほしいと思います。

図書館司書のメモ

現在私が、図書館の仕事について考えるなかで「図書の選定」という事が一番多い。図書の貸出、レファレンス・サービス、図書の整理とそれぞれ重要な仕事であるが、司書の仕事の中心になるのは「図書の選定」ではないかと考えている。一般に「図書の選定」についてそれほどつっこんで論議された例を今まであまり知らない。極めて地味な存在だという感じがする。経験豊かな司書と若い司書と、一見図書の選定にそれほど違いがあるように思えないのでやりがいがない気がして軽視してしまいがちのようである。しかし、そう早々とあきらめてしまっては利用者に済まない事である。利用者は図書館で選ばれた本しか読む事が出来ないのであるから、その読書範囲はかなり限定される事になる。したがって出来る限り利用者の要求をとり入れて購入して行かねばならない。

私は現在レファレンス業務といって利用者からの種々の質問に応じて、資料を活用し、回答する仕事に従事しているが、質問を受けた時何かしら図書館員の主体性というようなものを呼び起こされる事がある。質問が内容のあるものであればあるほどそれは強い。その時私の頭の中を走り抜けるものは、図書選定の在り方、資料検索の不備、学力の不足などである。これは良い経験だと思い、図書館のあらゆる業務へ質問の意味を演繹する必要があると思うが、思考のつきつめが足らなく、持続性のない事が、貴重な質問を無駄にしているように思えてならない。

読書が司書にも必要な事は言を待たないが学者が学者にふさわしい読書の仕方があるように、我々にもその特殊性があるのではないかと考える。そして思い当るふしは、やはり図書館業務を高める方向での、なかんずく「図書の選定」のための読書が必要ではないかと思う。利用者と図書館のために「図書の選定」は要の位置にあると言ってよいと思う。

司　書　豊　田　邦　雄

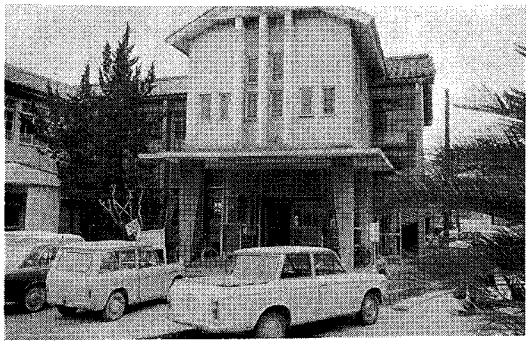
公共図書館の広場

益田市立図書館の巻

概　　況

当館は昭和27年８月１日益田市の誕生と共に益田教育委員会事務局内に創立され、松江県立図書館の分館として発足し昭和33年に隣接する益田放送局跡に移転してやっと独立館として面目を持った。この時蔵書数は約7000冊、昭和36年４月１日新市庁舎の創建を契機に旧市庁舎の階下を改造してこれに移転し、今日に至ったものである。

蔵書数約13,000冊。



現今では建物が老朽し、階上階下に浜田労政事務所、益田森林組合、市役所運転手控室等が雑居している関係上環境が良く無く利用者も自然と減少しているのに苦慮するものである。年間増加冊数僅に600冊、資料に新鮮さを欠き魅力が無いのもその一因である。

今後の課題

最近の経済社会の急激な変化にともない人口流出の激しい益田市を中心とする美濃郡、鹿足郡（１市５町１村）の地域に過疎対策の一環としての広域市町村圏の構想に基づき益田市立図書館も社会教育センターの一環としての活動に一部事務組合を設立し、図書資料を共同購入して社会教育の指導体制が十分でなく整備の遅れている各市町村の図書館あるいは図書室の図書資料を補完する役割をもたらすことから出発し、各市町村の図書館等の施設整備と住民の学習意識の昂揚を計りつつ年次計画によりブックモビルとしての整備を計ろうとするものである。又ブックモビルの機能を単に周辺の地区の住民に奉仕するだけでなくその機動力を有効に発揮して、団地職域等の読書会への貸出しや農業文庫、児童文庫の運営、集会、見学の資料として各市町村の社会教育指導あるいは地域サークルの教材として当初から多面的な活用を促進する。

ブックモビルに平行して視聴覚ライブラリーもその重要性が認識されながらも視聴覚教材の整備には相当の財政的負担が伴うため、現在まで各市町村とも十分なことができない状況である。かかる現状を改善するため視聴覚設備の設置及びその運用を共同で行ない住民の自主的学習の場に利用すると共に市町村行政部門や学校教育の面にも活用しようとするものである。

益田市立図書館の建設計画

当館は建物の老朽化と市庁舎分館建設のため近く解体されるのを期に、圏域の中心である益田市内に大規模な図書館を建設し地域の読書活動の指導的役割を果すとともに圏域の中核図書館として資料センター或は社会教育センターの拠点的機能をもった施設として整備しようとするものである。

構造は鉄筋２階建面積 534㎡、延面積 992㎡、一般閲覧室、児童閲覧室、書庫、郷土資料室、視聴覚室、事務室、研究室、民俗資料室、ブックモビル室、展示ホール等である。

事業計画

図書館建設後、協議会を結成し、社会教育センターとして拠点的機能をもたせる施設を図書館に併設しブックモビル（マイクロバス）巡回車２台を購入しブックモビル視聴覚ライブラリーに最低人員を整備して基幹図書館への貸出を開始する。

現有施設である圏域町村の図書館並びに図書室は県立図書館との連携を保ちながら内容の充実を計るとともに社会教育センターの地区センターとして整備拡充しようとするものである。

運用計画

各市町村の図書館または公民館の図書室に基本図書、参考図書、郷土資料、専門図書等を優先的に整備するものとし、ブックモビルによる運用図書は一般教養書、実用書、娯楽書、児童図書等比較的に表現が平易で読みやすいものを選定して当初は１万冊から出発し年次計画により３万冊程度まで整備する。貸出運行計画は市町村の社会教育事業計画と関連させ、幹事会で決定して運行する。ブックモビル本来の目的である１次生活圏に直接住民貸出しを行なうまでの間は、２次生活圏の基幹図書館又は公民館に千冊を貸出し２カ月毎に入れ替えを行ない乍ら運用しようとするものである。

実践するには道はまだはるかに遠い。

子供読書週間

図書館資料紹介

◎ 図　　書

今年度から試験的に幼稚園児にも図書の貸出しをすることにしました。そこで子どもたちの間で根強い人気のある本を二冊紹介してみます。

○ちいさなうさこちゃん

ディック・ブルーナ・文　　石井桃子・訳

福音館書店

絵が非常に簡潔であり、子どもたちの夢をいくらでもふくらませます。文を読みながらあるいは読んでもらって、耳からはいった言葉が、絵と結びついて、さらにイメージとしてえがける――この本は子どもが、本をみはじめる初期に与えたい絵本ですが、この本のシリーズとして〝子どもがはじめてであう絵本〟6冊があります。絵の線が明確で、動きのある絵本の一つとしておすすめします。

○ちびくろさんぼ

ヘレン・バンナーマン・文

岩波書店

作品の構成がすぐれているため、おもしろさのある本です。幸福な毎日を過ごしているくろんぼのちびくろ・さんぼがトラにおそわれ、着物やくつをとられるが、思わぬトラのけんかで、持ち物は無事にもどるし、トラのバターであげたホットケーキを196も食べた、という幸福・絶望・満足の筋はこびに、子どもの心は一喜一憂します。昭和28年の古い作品ですが、ずい分人気があり、最初に入れた本はボロボロになりましたので新しく購入し、現在三冊あります。

◎ 映画フィルム

16ミリ教育映画

○津軽の子ら　　カラー　39分

製　作　意　図

この物語りは、二人の兄弟とその父母の日常生活を通して、お金のねうちや働くことの尊さなどを、興味深く子どもたちに分り易く伝えようとするものである。

あ　ら　す　じ

弘は中学二年生、ラジオが大好きである。最近は同級生四人で小遣いを出し合って、受信機を組み立てる計画を進めたが、仲間の一人、泉田はどうしても小遣いが貰えずみんなから脱落してしまった。

それを知った弘の父は、泉田の家の事情や仲間の友情が欠けていることをあげて弘を叱った。みんなは泉田を一緒にひき入れるためアルバイトをし、その資金を作りはじめた。そんなある日、母は弘に、気の毒な女の子の家に 200円を置いて来た弟のことを話す。

やっと資金が出来、部品を買いに行こうと相談をしている時、漁船遭難のニュースを聞く。四人はラジオを作る気にもなれず、資金の全部を遺族に寄附してしまう。

ラジオは出来なかったが、弘たちは自分たちの行為に自信を持つと同時に、再びラジオを作る事を誓うのだった。

利用のおすすめ

物ごとを、自己中心に考えることが多いこの頃の子どもたち。思いやりのある健全な心を養うために、ぜひ利用していただきたい。

——46年 3月——

3月1日　郷土に関する逐次刊行資料展（3月中展示）
　　自動車文庫巡回（那賀コース2泊3日）（以下BM）
4日　松江市立乃木小学校6年生 140名見学々習
6日　大阪市立第二工芸高校尾原校長視察見学
8日　BM（美鹿コース4泊5日）
　　読書普及映画撮影（温泉津町・浜田市3泊4日）
9日　松江市立持田小学校6年生37名見学
　　秋鹿町婦人会15名見学
12日　図書館協議会（集会室）
　　松江市立竹矢小学校PTA12名見学
　　同朝酌小学校PTA30名見学
15日　松江市立朝日幼稚園児 110名見学々習
17日　BM（広瀬・横田コース2泊3日）
　　福岡県文化センター職員2名視察
20日　古文書を読む会（集会室）
　　国立国会図書館整理部高橋課長外1名来館視察
23日　BM（邑智コース3泊4日）
　　特許庁総務部会計課芳賀係長外1名来館視察
24日　国立国会図書館沢田主査来館視察
　　レリーフ工芸画展（博物館31日迄）
27日　埼玉県立浦和図書館杉山課長視察
（3月中閲覧者総数　13,660人）

昭和46年度当初予算事業別一覧表

（単位　千円）

事業名	予算額	説明
図書館運営管理費	9,495	1.図書館協議会費 495→ 350 2.図書館運営管理費 6,311→ 6,029 3.図書館維持管理費 3,367→ 3,016 4.西郷分館運営費 285→ 100
館外奉仕費	1,413	1.自動車文庫運営費 1,505→ 945 2.モデル文庫運営費 232→ 215 3.へき地子ども文庫等運営費 68→ 64 4.館外奉仕業務費 228→ 189
図書館活動振興費	330	1.各種文化事業開催費 348→ 169 2.各種展示事業費 46→ 11 3.研修会等読書普及事業費 265→ 150
視聴覚ライブラリー活動費	3,399	1.視聴覚ライブラリー運営費 665→ 509 2.視聴覚ライブラリー活動費 335→ 176 3.視聴覚資料購入費 3,214→ 2,714
館内奉仕費	551	1.列士録刊行費 835→ 0 2.各種研究会講習会費 372→ 181 3.館内奉仕業務費 542→ 370
資料整備費	11,453	1.県庁引継文書整理費 798→ 712 2.著者名目録作成費 220→ 0 3.図書資料購入費 9,600→ 9,400 {館内 4,800→ 4,800 館外 3,600→ 3,600 特別 1,200→ 1,000} 4.郷土新聞マイクロ化費 1,352→ 179 5.新聞雑誌等購入費 596→ 468 6.資料整理・製本費 1,565→ 694
合計	26,641	

昭和46年度県立図書館行事予定

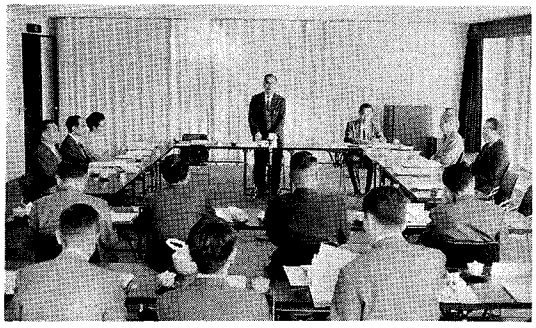
月	旬	行事・事業名	場所	内容・対象	備考
6	下	郷土文学に親しむ会	当館	一般	民具資料展
		読書リーダー研修会	浜田市	読書会等	
7	下	自動車文庫巡回（第2回）	関係市町村	読書会等	井上赴資料展
		映写機操作認定講習会	関係市町村	県内6カ所	
		郷土文学に親しむ会	当館	一般	
		郷土の歴史講座	当館・浜田市	一般	

各地読書拠点をむすぶ組織づくりと読書普及活動の効率化を！

——県立図書館協議会が答申——

島根県立図書館協議会は、昭和45年５月同図書館長より「読書振興策はいかにあるべきか」について諮問をうけ、数次にわたって審議を重ねていたが、さる３月31日付で同協議会長奥原秀夫氏はその答申書を県立図書館に送達した。

答申の内容は３節に分れ、第１、読書施設の充実と図書館網の整備、第２、図書館が行なう読書振興策、第３、地域読書運動に対する指導援助となっている。



テレビ時代などといわれるマスコミをはじめ情報過多な社会情勢の中で、人びとが自らの課題を解明していくためには読書のはたすべき役割がますます重要となってきたが、読書をもり上げるために、もっとも大切なことは住民の希望に応じて、いつでもどこでもまたどんな本や記録でも、早く容易に提供していくことにあり、そのためにもっとも基本的な課題は、(1)県内各地域に読書の拠点を設置してこれを結びあう図書館網をつくり、要求される図書資料を豊富に提供する体制づくりである。このことは教育施設行政にかかわることではあるが、図書館側からもその実現にあらゆる努力を重ね、さし当りは地域公民館の図書室の充実に援助協力すべきこと、(2)図書館が行なうべき読書普及策は、読書指導者の養成と研修に重点をおき、有能な人材の発掘などして地域社会において活発な読書運動が展開されることを期待し、また読書普及の対象には、特に社会的な自覚と家庭生活の向上をめざしている婦人層の読書と本に親しむ機会も多く読書力のおう盛な子どもの読書を重視している。(3)地域社会における読書普及について大切なのは、その地域の集団読書運動の実態に則して、これを助長していくことである。読書意欲のさかんな地域に対しては、大量な本の貸出しと集中的な指導を行なうことが必要であって、たとえばモデル地域を選定して先進的な役割を果たしていく方策をこころみるべきであるとしているが、まとめとして、急速に変化する社会に対処するためには、読書がもっとも有効な学習の手段であるから、住民の理解と読書への関心をたかめることによって読書運動を盛り上げていくことを主眼として図書館は活発な実践活動をなすべきであることを強調している。

人事異動

◎お世話になりました

奉仕課長　青木茂男（３月31日辞職　）
主　事　西原　茨（松江土木事務所へ）

◎よろしくお願いします

奉仕課長　坂本正紀（教育庁総務課より）
主　事　糸原守利（学事課より　）
主任司書　木佐由延（奉仕課へ　）
司　書　宍倉忠臣（振興課へ　）

図書紹介

島根の山林

——島根林業の特殊構造——

島根県企画部次長
柳浦文夫著

昭和26年、当時農地行政事務にたづさわった著者が、意欲的に執筆した「株小作の実体と開放過程」は単なる行政調査報告書たるにとどまらず、特殊小作慣行の実体を社会経済史を背景として解明したもので、高く評価されている貴重な資料であった。

この「島根の山林」は、著者が県農林行政の要職にありながら冷静な眼でとらえた県内山林の実態であり、経済史的な立場から林業の特殊構造を浮き彫りにし、これを今後の開発への手がかりとしようとした、いわば脚下照顧の好著であるといる。

——楫野健治——

新着資料の紹介

1. 図書資料

総　記

情報整理の技術	遠藤　昭
現代学問論	湯川　秀樹

哲　学

哲学の知恵と幻想	ピアジェ
お嬢さんこんにちわ	草柳　大蔵

歴　史

写真記録ヒロシマ25年	佐々木雄一郎
日本うら外史	尾崎　秀樹
イギリス王室の内幕	ダンカン
全国県史シリーズ全48巻	山川出版社編
日本の韓国併合	山辺健太郎

社会科学

変貌する都市	地域開発研究所
日本における政党と政治意識	中村　菊男
こどものための母親教育	志賀　匡
はたらく婦人の権利	陶山和喜子

自然科学

航海天文学の研究	利吉　利雄
新天体写真集	天文ガイド編
（カラー）日本の蝶	小檜山賢二

工　学

新しい住宅写真双書10巻	実業之日本編
現代日本の住宅	林　雅子
手あみ教科書	日本ヴォーグ社編

産　業

現代農産物流通論全6巻	家の光協会編
美容院の経営	経済技術研究会

芸　術

アサヒカメラ教室全7巻	朝日新聞社編
西部劇総覧	児玉　数夫
三筆三蹟	堀江　知彦

語　学

英語教授法全12巻	研究社編
言語と沈黙（上・下）	G・スタイナー

文　学

和歌史全5巻	久松潜一編
比較文学	早大比較文学研究室編
わが解体	高橋　和己
ポール・ニザン著作集全11巻	ポール・ニザン

レファレンス室

電気通信標準用語事典 第2版	日本電信電話公社編
原色西洋美術事典	現代美術社編
新古今集総索引	滝沢貞夫編

郷土資料室

美しき工芸技術	奥原　国雄
鷗外書志	滝田　貞治

小中学生

世界の産業	浅井　得一
熱と温度	福田　義一
ピノッキオのぼうけん	コルローディ・カルロ
へっこきじっさま一代記	大川　悦生

2　視聴覚資料（映画16ミリフイルム）

映画の題名	巻数等	内　容	対　象
若い年輪	カラー3巻	人手不足という深刻な問題を背負いながらも山林に明るく躍動する若い命を描く。	成人、青年
色彩と生活	カラー3巻	色彩の原則（理論）を判り易く解明し、色彩の科学的管理の問題を考える。	成人、青年
母と子の対話	白黒　3巻	スポーツがもつ人生的な意味をひたむきに追求し、実践する母と息子の姿を描く。	中、小
よみがえる金色堂	カラー5巻	金色堂の解体修理の様子を、昭和37年から7年間にわたって記録したもの。	成　人
神々のふるさと	カラー3巻	島根において古くから培かわれて来た伝統や、風光めいびな神々のふるさとを紹介。	成人、青年 高、中
げんこつとにぎりめし	白黒　3巻	父親、母親……この二つの異なる愛情の両極が子どもの成長に不可欠なものであることを訴える。	成人、青年
こころの準備	白黒　3巻	これから小学校に上る子どもの「こころの準備」を母親がどのようになすべきかを解説する。	成人(婦人)
おかしなおかしな星の国	カラー2巻	浪費の虚しさ、無計画な生活の愚かさを語りかける楽しく美しい漫画映画。	成　人 中、小
中国の陶磁	カラー2巻	5千年もの長い歴史をもつ中国の陶磁器の形、うわぐすり絵付の美を追求する。	成　人
津軽の子ら	カラー4巻	二人の兄弟とその父母の日常生活を通して、お金の尊さを子供たちにおしえる。	中、小
人間の生殖	カラー2巻	生殖器官の構造と機能を解説し、人間はどのようにして出生するかを理解させる。	成人、青年 高、中